



決行 前夜

制作
著

はかる
ファムファタル
総合案内所

放り込んでいく。嫌いな野菜を、呑まずに飲み下すように、何も考えないようにな
次々、次々。

悪いから、どこか別なところに置いておこう。そう思った時だつた。失くすと
扉の向こうで不機嫌そうな女の声。お母さんの声だ。

部屋の電気を付けないま片づけをしてたから、まだ愛梨が帰つてきてないと思つて
鍵を開けようとしたみたいで、なんだ、開いてるじゃない、という声が聞こえてくる。
少し間を空けて、ドアノブが回る音。ギー、と耳障りな音がして扉が開く。思つた通り派手なメイクで、着飾つたお母さんと目が合う。愛梨、いい事してたのに。いたずらが見つかったみたいな気持ちになつて、全然動けなくて。おかげり、とも、何も言えなかつた。何か言おうと思つた瞬間に、全
愛理はお母さんに殴られていた。

「何なの!! 当てつけのつもり!! 電気も付けないでコソコソコソコソ、片付けなん
かして!」
「あ……ごめんなさい」
反射的に謝つた後、しまつたつて思つた。お母さんにとつて、「ごめんなさい」
はもつと殴つていい、の合図。愛理が悪いことをしたつて認めたんだから、いく
らい、罰を与えていいこと。あちこち、どこがどうつて分からなくなるく

叩かれてるのは愛梨なのに、お母さんが短く悲鳴を上げた。
「ちよつと！それあたしの口紅ツ、返しなさいよ！泥棒！泥棒！！」
お母さんの長い爪が、リップを取り返そうと愛理の手を何度も引つかく。殴られたときに、無意識にリップを握り込んでやつてたみたいで、それが余計お母さんの機嫌を悪くしてしまったらしい。
盗むつもりなんかない、片付けようとしただけ、そんな風に言つてもどうせ無理はすぐに手を開いて、お母さんのリップを開放する。お母さんは床に落ちたりップをすぐに拾つて、まるで愛梨から守るみたいにカバンにしまい込んだ。
「意地汚い……信じらんない、あんた、本当にお父さんそつくりね……」
お母さんがお父さんの話をすると、もう殴らない、の合図。疲れて、愛梨のお父さんは、愛理が産まれる前にいなくなつた。
死んだわけじやない。これが、お母さんがグズグズに酔っぱらつていた時に聞いた話。
お父さんとお母さんは、若い頃、バーを開く予定だつたみたい。でもお父さんはその開店資金を持つて、逃げた。お母さんから。お母さんのお腹の中にいた愛理から。
今思うと、最初からバーなんてやるつもり、なかつたのかも。當時人気ホステスだつたらしいお母さんに適当にお金を作らせて、それを上手

いこと奪つてつただけ……だつたんじやないかな。
お父さんと出会つた時点で、お母さんと愛理の運命は決まつていたんだ。寂しくて、貧しくて、そんな母娘には、世界は冷たい。誰も助けてくれない、行き止まりの運命。
でも、愛理はその運命から逃げる。……いい仕事を紹介してもらつたんだ。五日間頑張れば、いっぱいお金を貰える仕事。いっぱいお金があれば、家から出ていける。
愛梨には銀行口座？も、カード的な物も無いし、あんな大金、また盗まれるんじやないかつて心配だ。たけど……運営の人は、必要になるときまで預かつてもいいつて言つてくれた。それなら大丈夫。絶対お母さんに取られたりしない。
お母さんはドレッサーの前に忘れてつたらしい何かをカバンに放り込んで、また玄関に向かう。
「……しばらく帰らないから。お金、あるでしょ」

「うん」「……汚いお金」
「そうかないお金」
「じやあ、綺麗なお金つてどこで貰えるの？」
「誰が愛梨みたいなバカを雇つてくれるの？」
「お金貯めて家を出で行こうつて決めた時。一応、コンビニとか飲食とか、フツイトをいくやつた。けど、愛理には上手く出来なかつた。みんなと同

じようには頑張つてゐるのに、みんなと同じように働くことが、無理だつた。遅刻。寝坊。シフトのすっぽかし(ワザと同じやないんだよ、うつかり忘れちゃうの)。ちゃんと出勤できても、まだまだ問題だらけだつた。メモを取つたのに、そのメモを失くしたり。メモがあつても、なんて書いてあるか自分で分かんない。大事な鍵をレジ横に置きっぱなしにしちやつたり。置いてあるかなかいよう。落とさないようにつて気を付けても、いつの間にかポケットかいてあるの、つて何度も怒られた。だから、みんなとは違う方法でお金を貰うしかなかつた。最初はバイト先の店長。今考えるとどちらかと少ないなつて思う金額だつたけど、それでも自分の力で稼いだお金つて思うと、すごい嬉しかつた。愛理にあんなガミガミ怒つてた店長にずっと、可愛い可愛いつて褒められるのも、まあまあ気分良かつた。気でもやりすぎちやつて、バイト先のみんなにバレて……愛梨はそこにいられなくなつた。別に愛梨はなに言われてもどうでも良かつたけど、もう店長が相手しきりから愛梨は店長以外の適当なおじさんを探して、お小遣いを貰つて。お母さんは、愛理がどうやつてお金を稼いでいるか知つて。ホステスとしていできた自信があるから、誰にでも体を売る愛梨のことを、軽蔑してゐんだ。どうせホステスつづつたつて、ちよつと気前のいい客がいればセック

木で出来た安っぽい扉が、愛理とお母さんとを強制的に別れさせる。おかげで

愛理は、お母さんみたいに汚い言葉を吐かずに済んだ。片づけをする気が無くなつたから、今日の晩御飯のことを考える。……考えようとする。でも、何も食べたくなかつた。ご飯を奢つてくれるおじさんもいるし、お金もたくさんあつて、愛理はなんでも好きな食べられるのに。全然食べたくない。そんな日が、最近は特に多かつた。

代わりに変な妄想が愛梨の頭の中で、ぐるぐる。一。お金持ちの家に生まれてたらな。出来れば、お父さんもお母さんも、両方も。そうすれば、いつも遊び相手がいて、さみしくない。おままごとでも鬼ごっこでも、毎日何でもしてあげる。でも、こんな事今さら叶いつこない。お金持ちと結婚することは、もしかしたらあるかもしれないけど、お金持ちは、お金持ちは、くつつくように出来る。そんなの愛梨でも知つてゐるよ。大体のお金持ちは、おまかで、明日から、頭いた。うー、いてて、と。なんつて、明日からの連休が大事。頭が痛いとか、そんなこと言つてら

いんない。しつかり仕事をこなして、お金をもらつて……。お金持ちじやなくともいいから、普通の生活を手に入れるんだ。ここにずっと縛られてるなんて、もう無理。新築じやなくてもいい。オートロックもいらない。お風呂とトイレが一緒でもいい。でも、散らかつてない家がいい。洗面台も、便器も普通に白くて。踏切の音なんか、全然聞こえない家。豊じやなくて、ちょっとだけ可愛い布団カバーを選んだりできたら、それ